



喜多埜

ツバメ

今夏、神山町の御本社ではツバメの飛ぶ姿が見られました。都会の真ん中でツバメが飛ぶ姿はとても珍しいもので、参拝者の方々からも驚きの声を頂戴しています。どこかに巣があるようです。少なくとも当神社におきましては、ここ二十年間、一羽も目撃例はありませんでした。

ツバメは渡り鳥で、春に日本にやってきて、夏の間の子育てし、秋になると南へと越冬の為に渡ります。越冬地はフィリピンなどの熱帯地方で、実に三千キロメートル以上も飛行して日本にやってくる訳です。

しかし、自分が巣を作った場所をきちんと覚えていて、昨夏に作った巣のあるところに戻ってくるといわれています。また夫婦仲の睦まじい鳥としても知られています。

ツバメは古くから益鳥とされ、害虫を食べてくれるので、ツバメが巣を作る家は栄えるとして、縁起物のように尊ばれました。

しかし現代、大気汚染や都市化でツバメは生活できなくなり、特に大阪市内は緑地の減少が著しく、ツバメは山の方に行かなければ見られないものとなっていましたが、今年、市内の中心部である御本社に現れた事は本当に珍しい事です。

ツバメの住まぬ土地は、人も生きるに苦しむ土地といわれます。ツバメが帰って来たという事は大阪市内も少しは良くなった証なのでしょうか。来年も来てくれる事を期待したいものです。

油売りとお断り

怠け者や、無駄に時間がかかる者として、「どこで油を売ってるのやら」などと言いますが、実はこの言葉の語源となったのは江戸時代の油売りで、その売っていた油というのは女性の整髪用の油や燈明用の油でした。

今と違って、当時の油というのはとても粘性が高く、一杯を入れるのにも大変時間がかかりました。ですので、油屋は油を入れている間、お客に面白い話をしたりして時間を繋ぐなど営業努力をしていたようで、中には飽きさせない為に貨幣の穴から油を通すなどの芸も生まれた程です。

しかし端から見るとその姿は油を買っている女性と長話をしたり遊んでいる風に見えたのでしよう。そこから怠け者をさして「油売り」という言葉が生まれてしまいました。当時の油屋さんからすると、さぞ腹がたつ言葉だった事でしょう。

今の明かりは電気で簡単に付けたり消したり出来るので楽ですが、当時の燈明は定期的にも何度か油を継ぎ足さねば消えてしまうのでとても面倒なものでした。その為、油継ぎを専門にする仕事もあつたほどです。この油を補充するのを失念して燈明を消してしまうこと事を「油断」といい、そこから注意不足をさす言葉になったといわれています。

しかし「油売り」も「油断」も実はその裏には人知れず努力をされた方の姿があります。普段何気なく見下しているものの本質を捉える目が、今の時代にはとても重要に思えます。油売りを嘲る己の心の慢心こそ、本当の油断大敵ではないでしょうか。

神社携帯サイトのQRコード

ドコモ、ソフトバンク、
au、モバイルPC 対応



編著 網敷天神社 禰宜(神主)

白江 秀知

